

日本人は働きすぎか？：

1976-2001 年 Time-use survey を用いた労働時間・余暇時間の計測

くろださちこ

黒田祥子

一橋大学 (E-mail: kuroda@ier.hit-u.ac.jp)

2008 年 1 月

要 旨

本稿では、『社会生活基本調査』（総務省：1976、1981、1986、1991、1996、2001 年調査）の個票データを用いて、日本人の平均労働時間および余暇時間の計測を行うとともに、過去 25 年間における時間配分の推移を観察した。『社会生活基本調査』は、個々人の一日の行動記録を 15 分単位で調査するユニークな統計であり、日本人の時間配分の仕方を詳細に観察することができる。

分析の結果、以下のとおりいくつかの興味深い点が確認された。第 1 に、日本人の週当たり平均労働時間は、1976 年から 1986 年をピークに増加した後、2001 年にかけて低下している。しかし、その低下は緩やかなものに留まっており、1976 年と 2001 年の 2 時点と比較すると週当たり労働時間は増加している。もっとも、1986 年以降の 15 年間に限ってみると労働時間はフルタイム男性雇用者に限定しても低下していることが確認された。第 2 に、男女計でみた一人当たり労働時間は『毎月勤労統計調査』の「賃金が支払われた時間」に比べて高く、両統計を単純に比較した場合、週当たりに換算して 4～5 時間程度の乖離があり、その乖離幅は年々拡大傾向にある。第 3 に、過去 25 年間のわが国では、高齢化、高学歴化、有配偶者の低下、少子化、自営業率の低下等、人口構成・ライフスタイルの変化が起こっているため、これらの構成比の変化を固定して一人当たりの労働時間を計測した。その結果、1976 年と 2001 年を比較すると男性の週当たり労働時間は構成比未調整の場合に比べて増加していることがわかった。しかし、1986 年から 2001 年にかけては、フルタイム労働者の労働時間は構成比を固定した場合でも男性で 1.5 時間、女性で 2.5 時間程度は低下している。また構成比等の変化を固定して余暇時間を計測したところ、1986 年から 2001 年にかけては男女ともに余暇時間も増加している。最後に、フルタイム雇用者にサンプルを限定し追加的な分析を行ったところ、学歴間・年齢間で時間配分に変化が生じていることが分かった。高学歴ほど労働時間が増加し余暇時間が減少しており、また 20 代や 30 代の若年層の労働時間が他の年齢層に比べて相対的に増加している。

本稿の作成に当たっては、山口幸三氏（一橋大学）、横内宏至氏（同）に有益なご助言をいただいた。また野口富子氏（一橋大学）には分析を行うに当たって多大な支援をいただいた。本稿の分析に用いたデータは、『社会生活基本調査』（1976、1981、1986、1991、1996、2001 年調査）の個票データである。ご助言・支援をいただいた各氏およびデータの利用をご許可いただいた総務省統計局に深く感謝申し上げたい。なお、本稿のありうべき誤りは、すべて筆者個人に属する。